

山代巴を読み継ぐことの希望

松本 麻里

竹内氏からは、主に山代巴についての文学者としての来歴、主な著作解題、とりわけ『人民文学』での松田解子との往復書簡から見えてくるもの、さらに運動史的な視点として戦後の尾道時代の中井正一との関わりにおいて、〈集団的民衆〉の形成を志した山代の活動について報告がなされた。

以下は竹内氏の報告へのレスポンスをベースとして、今日的フエミニズムの中に山代巴の実践と模索をどう再配置するか、また従来の一九七〇年代以降の「女性運動」をどのようにしてとらえ返すべきかという視点を供したい。

山代巴の戦後の実践ならびに著作中で、もつとも広く人々に知られることになった『荷車の歌』（一九五六年）は、当時から鶴見俊輔、中野重治らをはじめ賛否含めた多くの評論・批評にさらされることとなつた。その点について小坂裕子氏は主に男性知識人から書評や評論がほとんどを占めていることを指摘している。⁽¹⁾ ここではその中で突出している谷川雁が山代巴に向かた、以下の

ような熾烈な批判に山代がどのように応えたかを考察したい。谷川は山代の『荷車の歌』について以下のように述べる。

検事ふうの表現をすれば、上野英信とあなたは「大衆にわかるように書けるはずだ」という安手な信念の具体的な根拠を与えた点で、告発されなければならない。（中略）しかも検事として求刑の際に忘れてならないと思つてているのは、あなたが女であるということです。つまり純粹プロレタリアが犯した現状維持の罪でありますから、本来野蛮な職制である上野が犯した罪よりも数倍か重く求刑されるのが至当です。女たちが家父長制を打倒して剥き出しの裸で対等な位置に垂直に立ち続ける苦痛を避け、むしろ家父長制を温存しながら闘えば必ず勝つ絶対優勢の体勢を保つてゐるのは、男性にとって耐え難い損害であります。しかもあなたたはこの一方的に有利な形勢を打算し煽動した氣味がある。（中略）悔悛の情なきものと断ぜざるをえません。（『女のわかりよさ——山代巴への手紙』『工作者宣言』一九五九年）

この谷川に特有の皮肉まじりの激烈な批判からは、逆説的に谷川が山代を無視できない存在としていかに強烈に認識していたのかをうかがい知ることができる。このころ実際に谷川は筑豊からわざわざ山代の住む広島まで訪問し、「胸ぐらをつかまんばかりに」批判の言辞をむけたという。こうした谷川に対する山代巴の返答はいたつて淡淡としたものだつた。

あの作品はかつてガラス工場の密閉された職場の鏡に水鏡を作つたのと同質のもので、最も体制的に飼い慣らされた人々が胸襟を開く言葉の輪を作つてくれれば目的は達成された

ものと思っている。

ここでいう山代の「水鏡」とは、自分の表現行為は人々のためにむけられた「呼び水」にすぎない、という意味を持つ。これに谷川雁は「そんなのは言い逃れにすぎない」と再反論をするものそれにふたたび答えて山代は「私は私の戦中の職場体験を捨てる必要はない。これが私の人権擁護だ」というふうに一貫してゆるぎない姿勢を堅持する。山代のこの短い返答の中には、かつて京浜工業地帯の旭硝子工場における文化工作者として女性たちと労働・生活をともにした折に彼女が垣間見た集団的民衆形成の萌芽の体験と記憶が刻まれている。家父長制と工場労働という二重の桎梏のもとにある「最も体制的に飼い慣らされた」、言葉すら持ちえない女性らがつたないながらも言葉を獲得していく瞬間、また言葉が言葉を触発し、彼女らの言葉が増殖していくことへの期待と確信が存在する。

そうした戦前の京浜地区での女子工場労働者と向き合った時と同質の姿勢に貫かれ『荷車の歌』は書かれているのではないだろうか。山代は戦後、居を移した中国山地の「封建的」な因習にもとづく男女関係に留め置かれていた女性らに対し、みずからを彼女らの解放にむけた「媒介」として位置づけようとした。『媒介』にすぎないが故の「わかりやすさ」である。またそうした山代の経験の背後にある自負が、当時筑豊で炭鉱労働者の文化工作の困難に直面していた谷川をことさらに刺激したのではなかつただろうか。山代自身が「呼び水」に徹することによって、いいかえれば「呼び水にすぎない」と自ら足場を置き確信を持つことによって、その姿勢は強度を増す。そこには谷川が指摘するような

「大衆にわかる」、という目的ははじめから存在しない。大衆にわかるのではなく、大衆に自らをゆだねているとはいえないだろうか。その山代の確信犯ぶりを見抜いてしまったからこそ、谷川は「刑」を言い渡したのではないだろうか。

一方こうした一九五〇年代の山代巴の著作と活動について、現在的なフェミニズム・ジェンダー論などの評価を下しているのだろうか。今日に連なるフェミニズムは、一九七〇年代のウイメンズリブを起点として展開された。山代が取り組んだ戦前の労働運動の中での女性の解放、戦中の治安維持法体制下における獄中での格闘、また戦後直後から一九五〇年代に至る農村女性をとりまく因習の克服、といったテーマは影をひそめたかに見えた。とりわけ農村における「嫁」「姑」「妾」などの『荷車の歌』で扱われたテーマは、都市中産階級層の形成にともなう女性の苦悩や、抑圧といった主題にとつてかわった。婚姻制度内の立場を前提とした女性主体の立ても時代遅れのように思われた。

また、規模は大きかつたが思想的に貧しかつたといったように、山代を含む一九五〇年代の実践や著作には概して継承すべき点は、少ないようと言わってきた。また特にフェミニズムは、リブ以前の女性運動・女性解放の取り組みを「母」という立場に立脚した母性主義・本質主義と位置付け、リブ以前と以後を強調する傾向にある。またそうした母性主義こそが、翼賛体制を支えたイデオロギーであつたこと告発してきた。だが、山代巴に関してはそのような批判は必ずしもあたらないのではないだろうか。

山代は中井正一が「彼ら兵士がクリークに沈みつつ、瞼に描い

たであろう故郷の母や姉妹たちは、昭和皇后陛下の御歌『うつぶして香う春野の花のすみれ 人の心にうつしてしがな』の教育方針で育てられ、忍徳を美德とする大和撫子だったのだ。ちょうどあなたの方のような人々だったのだ。彼らはあなたがたに敬慕される男たちたるとしてあの戦場にぬけがけの埠塲を演じたのだ、このことを女性も反省しなければ、この備後路には平和の土台も民主主義の土台も築くことはできない」と話した折のことを回想し、「私はこの備後路の軍国少女たちの戦争反省の友になろう。そこから歩みはじめようと思つていたのです」と語る（「あきらめ根性、みてくれば根性、ぬけがけ根性のこと」『どつておけない話』一九八九年、怪書房）。戦時中は治安維持法違反帮助の罪で獄中にあつたのだから、山代は自らを総力戦体制から免責するような立場を選択することも、また逆に自分が「被害者」であったという立場を選択することも可能であつたはずだ。にも関わらず山代は、そのような立場をとることは選ばず、当時の軍国少女らに「友」として随伴し、反省する側に立脚しようとする。こうした山代の特異ともいえる戦後の立脚点について一挙に思想的に貧しかったと切り捨てるのではなく、同時代の女性活動家らの実践や著作との比較を通して、再解釈と再評価を加えるべきではないだろうか。

このように山代が工場内、農村、獄中にといった既存の家父長制的な体制の中にあって「後進的」かつ、「底辺」として存在する女性たちに一貫して注視のまなざしを向け、実際に向き合い続ける中で「一人の百歩より百人の一步」、個人の解放よりも、類としての女性の解放をあくまで志向しつづけ、「集団的主体形成」を思考した点は、今現在、新自由主義下の影響で、フェミニズムが直面している女性間の格差、また女性間の連帯の困難という課題を考えなおす上では、示唆的なのではないだろうか。

また文学史の上でも稀有な監獄における女性を扱った『囚われの女たち』では、山代が広島県内の三次刑務所での出来事が紹介されている。山代たち女囚はこの広島の三次刑務所から和歌山刑務所に移送されることになる。その折に山代は女囚らが「手錠腰縄」で拘束されずに移動できるようになると、刑務所長に対し女囚たちの希望を伝えるべく、自ら筆をとつて描いたかぶと虫の色紙をたずさえ直談判する。かぶと虫は自分の七十倍の力をもつて進むことができるという逸話のことよせた機知に富んだ談判である。その山代の熱意に打たれた刑務所長は例外的に女囚の人らを手錠腰縄なしに、和歌山までの遠距離を移動させることを決断する。こうした山代の「直談判」をうながしたのは、刑務所といふいわば極限状態、例外状態のただ中にあつて彼女と女囚らの間に芽生えた連帯のきざし、集団的民衆としての主体の萌芽であったのではないだろうか。そこには京浜工業地帯の女子労働者との関わりあいの中で山代がめざした、「一人の百歩よりも、百人の一步」と同質の類的存在としての女性の解放の「瞬間」が確かに存

在したといえるだろう。

た山代は、谷川雁の嫉妬と愛憎に十分値する「媒介者」、谷川以上の「工作者」であつたと言えるのではないだろうか。

このような山代巴の獄中での体験自体、他に比較すべき作品や著作に乏しい。しかし、一九七〇年代に合衆国で黒人解放運動に関わると同時に、黒人女性の従属性的であり方と格闘したアンジエラ・デイヴィスや、アサッタ・シャクールなどの女性らの回想録・自伝とどこか共振し重なりあう部分をもつてゐる^②。山代巴と同様、アンジエラ・デイヴィスも収監された拘置所や獄中で、犯罪者である女性から、自分の敵対者である女性看守（そのほとんどが黒人女性）に至るまで、連帯のまなざしを向け続けるのだ^③。その結果、教育を十分に受けられなかつた黒人女性らが、アンジエラが不當に囚われた政治犯であることに次第に憤りをおぼえ、拘置所内で抗議をはじめ、ハンガーストライキが自然と発生したこと、また女性看守が所内に持ち込み厳禁のアフロ・ヘア用「櫛」やボールペンの差し入れを許可しつつ、アンジエラに黒人女性でありながらも仲間を抑圧する側にまわる「看守」としての自らの矛盾を言葉として語りだすといった出来事が回想される。社会的慣習、ジエンダー秩序、階級秩序に囚われの身であつたからこそ、そこから逸脱せざるを得なかつた女性らの矛盾に向き合い、最後まで対話の道を閉ざさずに、彼女らの「言葉」が発せられる瞬間を「待つ」。そこには自分一人の解放ではなく、類としての解放をめざす山代との共通点が存在する。

戦前は都市部の女性労働者とともに、戦中は獄中内、また戦後は農村部・山間部に移動し、一貫して無名の底辺に存在する女性たちの声に耳を傾け、聞き書きや民話採取から着想を得て書き続け

注

1 小坂裕子『山代巴—中国山地に女の沈黙を破つて—』（家族社、二〇〇四年）。

2 この点は東琢磨の『おんなうた—ひそやかに手渡していくもの』（インパクト出版会、二〇〇四年）における日本のフェミニズムは理論中心の欧米の言説以上に、チカーナ・フェミニズムなどウイメン・オブ・カラーによる実践を参照軸にすべきではないかという主旨の指摘、ならびに直野章子氏との対話によって触発された。

3 アンジエラ・デービス『アンジエラ・デービス自伝・上下巻』（現代論社、一九七七年、加地永都子訳）。

彼女は近年のグローバリゼーションとネオリバーリズム下での収監者の増大という事態に対し、フェミニスト運動に関わる研究者や活動家は国家の懲罰機構の問題を周辺的なものに追いやつてはならず、根深くジエンダー化された懲罰機構が同時に社会のジエンダー機構を強化している点を問題とすべきだと指摘している（監獄ビジネス—グローバリズムと産獄複合体—）（岩波書店、二〇〇八年上杉忍訳）。こうした今日の問題を考える上でも『囚われの女たち』は希有な記録として再読されるべきではないだろうか。